

# 日本看護歴史学会 会報

日本看護歴史学会  
第35号  
2001年1月31日

## 看護歴史学会のあゆみ

—看護歴史関係文献の検索をめぐる—

高橋 みや子

第十四回大会では看護切手や看護用品の展示等新しい企画も試みられ、講演・研究報告や分科会も盛況のうちに終了しました。

来年の十五回大会（名古屋）を前に、学会活動の一つの指標となる研究発表に関して、大会時の研究報告や分科会報告の数と学会誌の論文及び講演その他の数を整理してみました。

大会時の研究報告と分科会報告は、表一の通り、若干の変動はみられますが、研究報告は毎年四五題、分科会報告は企画により異なりますが実施時には五〜八題となっています。安定した推移です。一方、学会誌の論文数は、表二の通り毎号一〜二題であり全く一

題もない年もあります。学会誌としては寂しい限りです。今後は、もっと会員の研究成果を投稿していただき数々の研究論文が掲載されるの学会誌としてより充実したものとなるよう願わざるをえません。さて、今回看護歴史文献を調べる作業をしている中で、看護関係雑誌掲載以外の文献を検索するには非常に困難を覚えました。特に各学会誌・学術集会誌及び大学・短期大学紀要掲載の文献は、手作業で行う以外の方策はないことが判りました。看護関係雑誌掲載文献は医中誌に採録され、それ以外はほとんど採録されていないからです。

この時、看護歴史文献検索に一番活用できたのは、本学会誌の看護歴史関係文献目録（看護関係雑誌・看護系大学紀要）でした。ところが、本学会誌があること知られていません。

いみじくも、一緒に作業した方曰く、「このような学会誌があるなんて知りませんでした。検索に載ってこないし……もったいない。歴史研究をしていない者が読んで面白くないし、それでいて水準の高さを感じます。看護学教育者の中に学会誌を活用したい方も居るでしょう」と。

本会は、手作りの会としてスタートし十四年歩んできましたが、誰もが容易に検索でき、研究成果を研究や教育に活用できるようにするために、そろそろ本学会の学会誌及び大会プログラム・抄録集のあり方や編集の方法などを検討する必要があることを痛感しています。

発足十五年目を節目に、いっそう学会が発展していくよう、皆様の英知をだしあって努力しようではありませんか。

（表は2頁に掲載）

### 第十五回大会予告!!

#### ◆開催期日

平成十三年八月二十四日（金）  
〜八月二十五日（土）

#### ◆テーマ

「看護史をひろげる」

#### ◆会場

名古屋市立大学看護学部棟

#### ◆内容

第一日目 講演、研究発表、総会、懇親会

#### ◆第二日目

分科会、他に写真展など

#### ◆研究発表の申し込みについて

研究発表を希望する方は

#### ◆演題名と氏名、所属、会員番号、連絡先を記入した官製はがきにて申し込んで下さい。

演題締め切り

#### ◆平成十三年四月十日

抄録提出は六月末日です。

#### ◆送り先

名古屋市立大学看護学部  
〒四六七―八六〇―  
名古屋瑞穂区瑞穂町

#### ◆字川澄一番地

大平 政子宛

#### ◆（当日消印有効）

抄録提出は六月末日です。

#### ◆（表は2頁に掲載）

抄録提出は六月末日です。

第十四回大会報告

特別講演「反ナチ抵抗運動と教育の改造」(要旨)

秋田大学教育文化学部教授 對馬 達雄

日本とドイツは、第二次大戦におけるファシズム、敗戦と無条件降伏、戦後のめざましい復興という点では共通している。しかし戦後のドイツは、一貫して過去を反省し、ナチズムを払拭しようと努力してきた。今夏のドイツ旅行で視察した施設と関連させて、ドイツの教育について語りたい。

ベルリン抵抗記念館は、ヒトラーの暗殺計画が失敗した「一九四四年七月二〇日事件」を顕彰するために一九五三年設立されたものである。またミュンヘン郊外にあるダッハウ強制収容所は、ヒトラーが一九三三年政権をとってすぐに設けられ、その後の強制収容所のモデルとされた。一九四五年までに二十二万六千人余りを収容、三万人以上を殺害した。現在は独房を博物館にし、記念碑には「Never Wider (Never Again)」と刻まれている。

ヒトラーが率いたナチ体制は「君は何者でもなく君の民族がすべてである」という狂言的なドイツ民族至上主義、生物学的民族論によって「劣等な」民族を排除した。ナチズムの教育は類型的同化の作用としての教育、つまり青少年の個性を無視する「金太郎飴」的人間の再生産であった。

政治的抵抗運動は現在でも、「ドイツの良心の証」として政治教育の題材とされている。ドイツは、九十八%がキリスト教徒であり、キリスト教が道徳の基盤であった。しかし、ナチス・イデオロギーは自らを政治宗教とし、宗教と教会を弾圧した。ライヒヴァインを反ナチス行動に駆り立てたものは良心の蜂起であった。なにかんなく、教育は主体的自己の形成をすることであるという信念を貫いて、ナチズム教育と安易な妥協をしなかった。一九三九年五月、第二次大戦勃発直前に、彼はティーフェンゼー農村学校を退き、「国立ドイツ民族学博物館」の部長になり、クライザウ・

表1 第1回～第14回看護歴史学会大会研究報告と分科会話題報告数

Table with 5 columns: 年, 回, 研究報告, 分科会, 計. Rows from 1987 to 2000.

(日本看護歴史学会大会抄録集に基づき作成)

表2 看護歴史学誌第1号～第10号掲載の講演等・研究報告数

Table with 5 columns: 年, 号, 講演等, 論文, 計. Rows from 1988 to 2000.

グループに参加し、政治的抵抗者となった。そしてナチス以後のドイツの改造を討議し、戦後の文部大臣になることに擬せられていた。ライヒヴァインやモルトケのクライザウ・グループの目標は「ドイツ人民の覚醒」であった。その考えの基本は「ナチズムは物質的な価値を過大評価し、精神的な価値と人間としての基礎を失った誤った発展の終着点である。『大衆人』は生きることへの不安から、確実性を願ってナチズムに逃げ込み、取り込まれたのだ。ドイツ人民は精神的に覚醒し、自ら判断できる人間でなければならぬ」ということであった。

政教分離は近代ヨーロッパ社会の流れであるが、彼ら抵抗者にすれば、キリスト教的ヒューマニズムの思想は、自国民のみでなく他の民族・国民と共生する普遍的な思想といえる。隣人愛に根ざすキリスト教的道徳を根本的に再生することは世俗化した世界にあって、決して時代錯誤ではなく、ナチスによる破壊と野蛮の状態を克服する道として選択されたのである。戦後のドイツは先進国において独自の「キリスト教教育の復権」という教育の骨格を形成した。戦後復興の中で、ネチ・ナチという極右集団も出現しているが、抵抗運動が残したキリスト教的ヒューマニズムにもとづく教育は、二十世紀にはさらに強く求められるのではないだろうか。

